

大学生の非主張性とその規定因との関連

目白大学大学院心理学研究科 高濱 怜美
目白大学人間学部 沢崎 達夫

【要 約】

近年、円滑なコミュニケーションをとるために、アサーションが注目されている。アサーティブではないコミュニケーションは、攻撃的、または非主張的と分類される。本研究は、「相手は大切にすが、自分は大切にしない」非主張性と、その規定因との関連を検討することを目的に行われた。

都内大学生306名を対象に、非主張性尺度、JIBT-20、青年用アサーション尺度、自己肯定感尺度、日本版FNE短縮版、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度、KISS-18の7つの尺度を使い、集団式質問紙調査を実施した。各尺度間の相関係数を算出した後、重回帰分析による分析を行なった。その結果、非主張性の感情面については、対人不安の高さが最も影響しており、また、非主張性の行動面にはソーシャルスキルの不足が最も影響していることが示された。これらことから、非主張性の感情面の改善には対人不安の高さに、非主張性の行動面の改善にはソーシャルスキルの不足にアプローチをすることが、有効であることが示唆された。今後の課題としては、本研究で取り上げていない規定因との関連、自己尊重と他者尊重のバランスなどが考えられた。

キーワード：アサーション、非主張性、対人不安、社会的スキル

問題と目的

1) アサーション (assertion) と非主張性 (non-assertiveness)

近年、円滑なコミュニケーションをとるために、“自分も相手も大切にしたい自己表現” (平木, 2009) であるアサーションが注目されている。アサーションという言葉は、現在ではそのまま「アサーション」と表現することが増えているが、従来、「自己主張」や「主張性」と訳されてきた。本研究では著者がアサーションと同義または訳語として「主張 (性)」という言葉を使っている場合には、そのまま「主張 (性)」という言葉を使うこととする。

アサーティブではない自己表現は、「攻撃的」または「非主張的」な自己表現と分類される。攻撃的な自己表現は“自分は大切にすが、相

手を大切にしない自己表現”、非主張的な自己表現は“自分は大切にすが、相手を大切にしたい自己表現” (沢崎, 2006) と考えられる。非主張性の特徴として、安藤 (2009) や平木 (2009) は、自分の感情を表現できない、自分の感じた感情を押し殺す、まわりくどい言い方をするなどの傾向をあげている。これらことから、非主張性の概念には、「言えない」という行動に限らず、表現することへの不安、表現することは出来ても相手にきちんと伝えることが出来ないといった要素が含まれていると考えられる。本研究では、非主張性を「自分の感情、意見、欲求等を率直に表現することに対して不安・抵抗等を感じることによって、それらを表現できないあるいは表現し損なうこと」と定義することとした。

2) 非主張性研究の現状

アサーション・トレーニング及びアサーションという概念は、元々アメリカで発展した。従来、日本におけるコミュニケーションの在り方を、中山(1989)は、「ぼかし」コミュニケーションとした。「ぼかし」コミュニケーション(中山, 1989)とは、断定した表現を避け、曖昧でぼかした日本人特有のコミュニケーション方法のことを指している。また、中山(1989)は、“日本人のコミュニケーションの基本は、相互の一体感を得るために自他の感情の動きに最大限の配慮を払う”と指摘した。斎藤(1993)は、“自己表現をしないことが美德であるといった因習や、話さなくても分かる、話さなくてはならないようでは駄目だといった概念”が日本にあったことを指摘している。このように、日本におけるコミュニケーションでは、自己表現をしないことが集団に適応的であるとされている。日本文化においては、自己主張をしないことが集団、ひいては社会に適応的であるとされているが、高濱・沢崎(2012)は、こうした日本文化のコミュニケーションの在り方が背景にあるため、「言えない」ことによって不適応をおこしうる非主張性にあまり焦点が当たらず、検討されることが少ないと指摘している。

三田村・横田(2006)は、対人恐怖心性と拒否回避欲求を取り上げ、それによってアサーティブ行動が阻害されることで非主張的なコミュニケーションになることを示唆した。高橋(2006)は先行研究から、スキル不足・不合理な信念(Irrational Beliefs)・自尊感情・自己信頼・自己理解・アサーション権の認知・アサーションへの評価などの認知的側面と、対人不安・シャイネスなどのパーソナリティの側面を含む個人要因、さらにソーシャルサポート・グループサイズ・学級風土等の環境要因がアサーションの規定因であると整理した。益子(2008)は、過剰適応傾向の特徴として自己主張の抑制を挙げ、見捨てられ不安が他者に従順に従う傾向を高める要因であることを明らかにした。Halford(1982)は不安の高さがアサーション行動を阻害させる可能性を示した。古市・乗金・原田(1991)は、自信あるいは自己

信頼感の欠如や自己評価の低さは、主張性全般の低さにつながるとし、対人的主張性に関わる行動を規定する性格的要因としては、社会的向性が非常に重要だと述べている。このように、非主張性と成り得る要因は、様々なものが考えられている。こうした実証的研究の中では、アサーション尺度得点が低いことが非主張的であると捉えられることが多かった。しかしこの中には、主張しないと決めた上での主張しない行動(金子・中田, 2003)や、熟考的な主張性(柴橋, 1998)などが含まれているという指摘がなされている(高濱・沢崎, 2013)。こうした指摘から、非主張性とその要因間との関連は、非主張性を独立して測定した上で検討する必要があると考えられる。

非主張的なコミュニケーションであることの影響として、柴橋(1998)は、他者との親密さを重視すれば自分らしい世界を維持できなくなると指摘している。平木(2009)は、非主張的なタイプの人には、引込み思案、依存的、自己否定的で自尊心が低く、いつも不安で緊張に満ちた生活を送っていると述べている。また、土田(2007)は、周囲に過剰に適応し自分の内的な状態を認知しにくい傾向が、セルフケアを抑制する効果を持つことを示した。松井(2006)は、自己の視点を抑えた上での同調となり、そのことで卑屈になったりストレスを感じたりと、他者との関係を持つことがしんどく感じられると述べている。このように、非主張的なコミュニケーションであることによって、身体的・精神的健康に影響を及ぼすことが予測されるため、非主張的なコミュニケーションを改善する必要性が求められていると考えられる。

先にも述べたように、非主張的なコミュニケーションとなる背景には、様々な要因が影響していることが先行研究から明らかにされており、また、それらが互いに複雑に影響し合っていることが予想される。しかし、アサーション研究において非主張性に焦点を当てた研究はあまり見られず、これらの要因間の関連は十分に検討が成されていない。高橋(2006)は、アサーションの規定因解明の研究はさらなる進展が求められ、それによってアサーション促進へ向けた環境づくりや支援方法の進展につながると

述べている。非主張性を特徴付ける要因同士の関連性を検討することは、アサーション・トレーニング等の主張性援助を行う際に、介入のターゲットが明確になるため、より効果的な支援の一助となることが期待される。

3) 本研究の目的

以上のことから本研究は、平木（2009）、益子（2008）、高橋（2006）を参考に非主張性の規定因として、社会的スキルの不足、不合理な信念（Irrational Beliefs）・自己肯定感の低さ・アサーション権の認識不足、対人不安・拒否回避欲求を取りあげ、非主張性に影響する要因を明らかにするために、非主張性と規定因との関連を検討することとした。

研究方法

上記目的のため、大学生男女319人を対象に、質問紙調査を行った。質問紙は、講義終了時に配布・回収した。研究の主旨の説明、回答は無記名で行い、個人が特定されることはないこと、回答したくない質問は飛ばして良いこと、回答用紙は厳重に管理し、研究終了後は速やかに処分することを質問紙表紙に記載し、また質問紙配布時に口頭で説明し、了承を得た方のみ回答してもらった。調査実施時期は2010年9月下旬から10月中旬であった。

質問紙は、以下の質問紙を使用した。

非主張性を測る尺度は、高濱・沢崎（2013）の非主張性尺度12項目を使用した。この尺度は、非主張性を独立して測定することができ、また非主張性を感情面と行動面双方から捉えることができる尺度である。「全く当てはまらない（1点）」「やや当てはまらない（2点）」「やや当てはまる（3点）」「非常に当てはまる（4点）」の4件法で回答を求め、得点の高い者ほど非主張性が高いものとした。

不合理な信念（Irrational Beliefs）を測る尺度として、不合理な信念測定尺度（Japanese Irrational Belief Test）短縮版（JIBT-20）（森・長谷川・石隈・嶋田・坂野，1994）を使用した。「全くそう思わない（1点）」「あまりそう思わない（2点）」「だいたいそう思う（3点）」「全くそう思わない（4点）」の4件法で回答を求め

た。森他（1994）は5件法で尺度を作成したが、本研究では専門家1名と大学院生7名で協議の上、調査協力者の回答のしやすさを考慮して4件法で調査を行い、得点の高い者ほど不合理な信念が強いものとした。

アサーション権の認知を測る尺度は、高濱・沢崎（2013）が作成した青年用アサーション権尺度8項目を使用した。「全く当てはまらない（1点）」「やや当てはまらない（2点）」「どちらとも言えない（3点）」「やや当てはまる（4点）」「非常に当てはまる（5点）」の5件法で回答を求め、得点の高い者ほどアサーション権の認知が高いと判断した。

自己肯定感を測る尺度は、自己肯定感尺度 ver. 2（田中，2005）を使用した。自尊感情を測定する尺度はRosenberg（1965）の自尊測定尺度が代表的であるが、田中（2005）はこの翻訳版の尺度に対して、文化的問題、因子構造の問題、翻訳版の多さと採点方法の多様さによる問題を指摘しており、新たに自己肯定感尺度を作成した。本研究では、この改訂版である自己肯定感尺度 ver. 2を使用することとした。項目数は8項目で、「全く当てはまらない（1点）」「やや当てはまらない（2点）」「やや当てはまる（3点）」「非常に当てはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。また、得点の高い者ほど自己肯定感が高いとした。

対人不安を測る尺度は、他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度（Fear of Negative Evaluation Scale；以下FNEと表記）短縮版（笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂田，2004）を使用した。FNE短縮版は、①広範囲の被検者に対して高い測定精度をもち、②特に不安の高い被検者に対して原版のテストよりも高い信頼性を示す、③項目数の少ない簡便な検査である（笹川他，2004）ことが確認されている。「全く当てはまらない（1点）」「やや当てはまらない（2点）」「どちらとも言えない（3点）」「やや当てはまる（4点）」「非常に当てはまる（5点）」の5件法で回答を求め、得点が高い者ほど対人不安が高いとした。

社会的スキルを測る尺度は、社会的スキル尺度（KISS-18）（菊池，1988）を使用した。社会的スキル尺度（KISS-18）は社会的スキルを全

般的に測定することの出来る尺度という目的のために開発されて以降、多くの研究者によって取り上げられてきた。コミュニケーション行動や性行動、インターネットの使用など具体的行動との関係も明らかにされており(菊池, 2004)、十分な信頼性と妥当性を有していると判断した。「いつもそうでない(1点)」「たいていそうでない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「たいていそうだ(4点)」「いつもそうだ(5点)」の5件法で回答を求め、得点が高い者ほど社会的スキルが高いとした。

拒否回避欲求を測定する尺度は、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度(小島・太田・菅原, 2003)の下位項目・拒否回避欲求9項目を使用した。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度は、菅原(1986)の「賞賛されたい欲求」「拒否されたくない欲求」の測定尺度をふまえ、自己呈示的行動に対する評価目標を測定する尺度である。菅原(1986)の項目は、項目数が少ないことや、分散が小さく2つの欲求間の相関が高いといった欠点があげられており、尺度の妥当性や信頼性に関する検討が十分にはなされていないという指摘がなされている(小島他, 2003)。小島他(2003)の尺度は、再テスト法による信頼性が確認され、菅原(1986)の尺度と比較して尺度間の独立性が高いことが示されていることから、本研究では賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を採用し、そのうち拒否回避欲求の9項目を使用することとした。「当てはまらない(1点)」「やや当てはまらない(2点)」「どちらとも言えない(3点)」「やや当てはまる(4点)」「当てはまる(5点)」の5件法で回答を求め、得点が高い者ほど拒否回避欲求が高いとした。

結果

1) 各尺度の信頼性

記入漏れや無回答のデータを除いた有効回答者は306名(男性112名, 女性194名, 平均年齢19.84歳, $SD=1.67$)であり、これらを今後の分析に用いることとした。

先行研究において不合理な信念測定尺度短縮版(JIBT-20)は5因子構造、青年用アサーション権尺度は2因子構造であることが確認されているが、本研究においては探索的研究として

大枠を捉えることを優先させ、また他の1因子構造の尺度との整合性をはかるために、下位尺度ごとに得点を算出せずに、1つの尺度として基礎統計量を求め、その後の分析を行うこととした。

まず、本調査で用いた尺度の基礎統計量を求めた。非主張性尺度の下位尺度「主張に対する不安・後悔」は平均2.96, $SD=.88$, 「率直な意見表明の回避・困難」は平均2.10, $SD=.98$, 不合理な信念測定尺度短縮版(JIBT-20)は平均2.54, $SD=.93$, 青年用アサーション権尺度は平均4.15, $SD=.88$, 自己肯定感尺度ver. 2は平均2.63, $SD=.91$, 日本版FNE短縮版は平均3.03, $SD=1.24$, 社会的スキル尺度(KISS-18)は平均3.05, $SD=1.11$, 拒否回避欲求は平均3.30, $SD=1.21$ であった。青年用アサーション権尺度では平均値が高く出ていることから分布の偏りがあると思われたため、各項目ごとの平均値と標準偏差を確認した。結果、2つの項目で天井効果が確認された。天井効果が確認された項目は、「2. 自分は他の人とは違うし、人と違っているのが当たり前である」(平均4.42, $SD=.78$)と「8. 人は誰でも失敗するものだし、失敗しても良い」(平均4.34, $SD=.88$)であった。これは青年用アサーション権尺度の項目が、このような権利を持っていることを認識しているかを尋ねているため、高い得点に回答する協力者が多かったものと考えられた。2項目において天井効果が確認されたが、削除することによって尺度の内的整合性が低下するため、先行研究において内容的妥当性は十分に備えていると判断し、今後の分析に用いることとした。

調査で用いた尺度の内的整合性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出した。非主張性尺度の下位尺度「主張に対する不安・後悔」 $\alpha=.82$, 「率直な意見表明の回避・困難」 $\alpha=.75$, 不合理な信念測定尺度短縮版(JIBT-20)は $\alpha=.83$, アサーション権尺度は $\alpha=.85$, 自己肯定感尺度ver. 2は $\alpha=.84$, 日本版FNE短縮版は $\alpha=.92$, 社会的スキル尺度(KISS-18)は $\alpha=.91$, 拒否回避欲求は $\alpha=.91$ であり、いずれもほぼ十分な内的整合性が確認された。非主張性尺度は下位尺度ごとの得点とを項目数で割った平均得点を、不合理な信念測定

尺度短縮版 (JIBT-20), アサーション権尺度, 自己肯定感尺度, 日本版FNE短縮版, 社会的スキル (KISS-18), 拒否回避欲求は総得点をそれぞれの項目数で割った平均値をそれぞれの尺度得点として今後の分析を進めることとした。

2) 各尺度得点間の相関係数

次に, 各尺度得点間の相関係数を算出した (Table1)。非主張性尺度の下位尺度「主張に対する不安・後悔」と「率直な意見表明の回避・困難」($r=.51, p<.01$), 不合理な信念 ($r=.43, p<.01$), 対人不安 ($r=.65, p<.01$), 拒否回避欲求 ($r=.56, p<.01$), 非主張性尺度の「率直な意見表明の回避・困難」と不合理な信念 ($r=.28, p<.01$), 対人不安 ($r=.42, p<.01$), 拒否回避欲求 ($r=.42, p<.01$), 不合理な信念と対人不安 ($r=.41, p<.01$), 拒否回避欲求 ($r=.49, p<.01$), アサーション権の認知と社会的スキル ($r=.24, p<.01$), 自己肯定感と社会的スキル ($r=.61, p<.01$), 対人不安と拒否回避欲求 ($r=.69, p<.01$) であり, これらはいずれも有意な正の中等度から弱い相関が得られた。

また, 「主張に対する不安・後悔」と自己肯定感 ($r=-.45, p<.01$), 社会的スキル ($r=-.44, p<.01$), 「率直な意見表明の回避・困難」とアサーション権の認知 ($r=-.215, p<.01$), 自己肯定感 ($r=-.36, p<.01$), 社会的スキル ($r=-.49, p<.01$), 不合理な信念と自己肯定感 ($r=-.31,$

$p<.01$), 社会的スキル ($r=-.23, p<.01$), 自己肯定感と対人不安 ($r=-.48, p<.01$), 拒否回避欲求 ($r=-.30, p<.01$), 対人不安と社会的スキル ($r=-.38, p<.01$), 拒否回避欲求と社会的スキル ($r=-.23, p<.01$) であり, これらはいずれも有意な負の中等度から弱い相関が得られた。

3) 非主張性と各要因との関連

「主張に対する不安・後悔」と「率直な意見表明の回避・困難」を従属変数, 不合理な信念, アサーション権の認知, 自己肯定感, 対人不安, 拒否回避欲求, 社会的スキルを独立変数とした, 強制投入法による重回帰分析を行った (Table2)。

「主張に対する不安・後悔」($R^2=.515, p<.01$) では, 対人不安 ($\beta=.37, p<.01$) が最も強く影響を与えることが示された。次いで社会的スキル ($\beta=-.22, p<.01$), 拒否回避欲求 ($\beta=.18, p<.01$), 不合理な信念 ($\beta=.12, p<.05$), アサーション権の認知 ($\beta=.09, p<.05$) が影響を与えていることが示された。

「率直な意見表明の回避・困難」($R^2=.363, p<.01$) では, 社会的スキル ($\beta=-.36, p<.01$) が最も強く影響を与えることが示された。次いで, 拒否回避欲求 ($\beta=.27, p<.01$), アサーション権の認知 ($\beta=-.12, p<.05$) が影響を与えていることが示された。

Table1
尺度得点の相関係数

	主張に対する不安・後悔	率直な意見表明の回避・困難	不合理な信念	アサーション権の認知	自己肯定感	対人不安	拒否回避欲求
率直な意見表明の回避・困難	.51**						
不合理な信念	.43**	-.29**					
アサーション権の認知	.03	-.21**	-.01				
自己肯定感	-.45**	-.36**	-.31**	.05			
対人不安	.65**	.42**	.41**	-.00	-.48**		
拒否回避欲求	.56**	.42**	.49**	-.00	-.30**	.69**	
社会的スキル	-.44**	-.49**	-.23**	.24**	.61**	-.38**	-.23**

** $p<.01$

Table2
重回帰分析の結果

	主張に対する 不安・後悔	率直な意見表明の 回避・困難
	β	β
不合理な信念	.12*	.03
アサーション権の認知	.09*	-.12*
自己肯定感	-.06	-.01
対人不安	.37**	.09
拒否回避欲求	.18**	.27**
社会的スキル	-.22**	-.36**
R^2	.52**	.36**

* $p < .05$, ** $p < .01$

考察

1) 「主張に対する不安・後悔」への影響

「主張に対する不安・後悔」への影響は、対人不安が最も強く影響を与え、次いで社会的スキルの低さ、拒否回避欲求の強さ、不合理な信念の強さ、アサーション権の認知の低さという順に影響を与えていることが示された。「主張に対する不安・後悔」は主張する際または主張した後の感情の動きについて尋ねる項目で構成されている。すなわち、非主張性の感情に関する概念であると言えよう。この結果から、対人不安、社会的スキルの低さ、不合理な信念、拒否回避欲求、アサーション権の認知の低さが非主張性の感情面を規定することが示唆された。また非主張性の感情面については、対人不安が最も影響を与えることが示され、非主張性の感情面の改善には、対人不安への介入が有効であると示唆された。

本研究で使用した対人不安の尺度は、笹川他(2004)が作成した日本版FNE短縮版であり、「他者からどのように見られているか気になる」ということについて測定している。中山(1989)は、「「ほかし」コミュニケーション」について、「心証を害した相手が自分に対して否定的なイメージを持つという当然の結果を回避する、という意図があることは明らかである」と述べている。言い換えると、否定的な評価を得ないために、「ほかし」コミュニケーション

(中山, 1989)を取るということであろう。このように、本研究で測定した対人不安は日本文化に強く関連していると予想され、これによって非主張性の感情面である「主張に対する不安・後悔」に最も強く影響したと考えられる。

2) 「率直な意見表明の回避・困難」への影響

「率直な意見表明の回避・困難」への影響は、社会的スキルの不足が最も強く影響し、次いで拒否回避欲求の強さ、アサーション権の認識不足、対人不安の高さという順に影響を与えていることが示された。「率直な意見表明の回避・困難」は、自分の言いたいことをアサーティブに伝えることが出来るか、伝えているかを中心に尋ねる項目で構成されている。すなわち、非主張性の行動に関する概念であると言えよう。この結果から、アサーション権の認知の低さ、拒否回避欲求、社会的スキルの低さ、対人不安が非主張性の行動面を規定することが示唆された。また非主張性の行動面については、社会的スキルの低さが最も影響を与えることが示され、非主張性の行動面の改善は、社会的スキルのトレーニングが有効であることが示唆された。

社会的スキルは対人関係を円滑にするスキル(菊池, 2004)である。アサーションは社会的スキルの一部である(渡部・稲川, 2002)という見方もあり、柴橋(1998)は先行研究から、

学習することができ、社会的に受け入れられるような行動であることを見出ししている。「率直な意見表明の回避・困難」は、非主張性の行動に関する概念であることを踏まえると、社会的スキルの方がより対人場面における包括的なスキルであることがいえるため、社会的スキルが不足し、対人関係を円滑にする行動が出来ないと、アサーティブに表現するスキルも不足しているため、うまく自分の意見や感情を率直に表現することが出来ないと言うことができよう。そのため、非主張性の行動面に最も強く影響するという本研究の結果が示されたものと思われる。

社会的スキルに関して、平木（2009）は、メディアやインターネットが発達したことにより、自己表現をする機会が減り、コミュニケーション能力が発達しにくい状況にあるとし、それによって人と関わることを避け、さらに表現能力も関係能力も向上しないという悪循環を辿っていると述べている。文字による交流が主流になったことで、直接人とコミュニケーションを取る様々な場面に慣れてその都度学習することが出来ないため、言葉による交流で、「どのように言えば良いか分からない」といった課題に直面することが予測され、アサーション・トレーニングにおける課題として、表現するスキルや方法が頻繁に取り上げられている（平木、2009）。また、柴田（2010）は兄弟とのコミュニケーション量が多い子どもの方が社会的スキルを身につけていることを示唆し、重吉・森田・湯澤・大塚（2009）は小学生を対象とした調査から、遊ぶ人数の多さと社会的スキルの高さの関連を示した。これらの研究から、社会的スキルの低下は、現在の社会問題の1つとして挙げられている少子化の影響を受ける可能性も考えられる。さらに重吉他（2009）は、現代の遊びはゲームやテレビが中心の屋内・孤立型という特徴があり、その要因として少子化、地域の結びつきの希薄さ、遊ぶ場所や時間の減少、インターネットやコンピューターゲームの普及が考えられると述べている。屋内・孤立型の遊びはお互いに会話や関わり合いを持たないという状況を生み出すことが予想され、重吉他（2009）は社会性の発達に影響を与えると指摘

している。このような通信機能の発展、少子化、遊ぶ場所・時間の減少やゲーム機器の発達、言葉によるコミュニケーションに影響を与え、本研究のような結果に繋がったものと考えられる。

3) 自己肯定感について

自己肯定感から「主張に対する不安・後悔」「率直な意見表明の回避・困難」への影響は、どちらも有意な結果が得られなかったが、相関係数では中程度の負の相関が得られていることから、関連があることは一応示された。Alberti & Emmons（2008；菅沼・ジャレット訳、2009）は、自己否定的な態度を取ることで、自己抑制的な行動となり、まるで尊敬に値しない人であるかのような他者からの対応というフィードバックを経て、より一層自己否定的な態度となるというサイクルを示唆している。このサイクルに本研究の結果を当てはめると、自己否定的な態度をとることで、他者に対して主張することへの不安が募り、「言いたいのに言えない」「うまく言えない」という行動へと繋がり、自己肯定感が下がる、それによってさらに自己否定的な態度となるというサイクルが想定される。サイクルの中では、その全てが連続的に関わっているため、明確な因果関係を示すことが出来ない。非主張性と自己肯定感は、こうした循環的な関係にあることが予想され、関連はあるものの明確な因果関係は示されないという本研究のような結果になったものと考えられる。

4) 今後の課題

これまで様々なアサーションに関する研究において、その規定因についての検討が成されてきたが、その規定因同士の関連や比較検討したものは、あまり多く見られない。その中で、不合理な信念、アサーション権の認知、自己肯定感、対人不安、拒否回避欲求、社会的スキルという6つの要因を取り上げ、非主張性との関連について検討した点に、本研究の意義があると思われる。しかし、本研究で取り上げた6つの要因は、非主張性の規定因としては一部分に過ぎない。高橋（2006）はこれ以外にも、個人要因としてシャイネスやアサーションへの評価、

効果期待, 環境要因としてソーシャルサポート, グループサイズ, 学級風土があることを先行研究から見出している。平木 (2009) や玉瀬・馬場 (2003) は, コミュニケーションをとる相手との関係性や主張場面によって, 個人の行動が変化することを示している。また, アサーション研究の中でも「他者尊重」の概念の重要性が唱えられており, 阿部 (2007) の指摘からは, 非主張性が高いタイプは, 他者尊重が高く, 自己尊重とのバランスが悪いコミュニケーションパターンであると予測される。今後は, 個人内における自己尊重と他者尊重のバランスの悪さ, また同一個人内における非主張性や攻撃性のコミュニケーションパターンのバランスなども考慮し, さらなる検討が求められると考えられる。

【引用文献】

- 阿部真由美 (2007). 大学生の友人関係におけるアサーション—「自己受容」と「他者受容」のバランス 聖心女子大学大学院論集, **29**, 177-196.
- Alberti, R. E., & Emmons, M. L. (2008). *Your Perfect Right: Assertiveness and Equality In Your Life and Relationships*. (菅沼憲治・ジャレット純子 (訳) (2009). 自己主張トレーニング 改訂新版 東京図書)
- 安藤有美 (2009). 大学生における自己表現スタイルと場面特性との関連 カウンセリング研究, **42**, 50-59.
- Halford, K., & Foddy, M. (1982). Cognitive and social skills correlates of social anxiety. *British Journal of Clinical Psychology*, **21**, 17-28.
- 平木典子 (2009). 改訂版 アサーション・トレーニング—さわやかな〈自己表現〉のために— 日本・精神技術研究所.
- 菊池章夫 (1988). Kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目) 桜井茂男・松井豊 (編) (2007). 心理測定尺度集4 子どもの発達を支える「対人関係/適応」サイエンス社 pp. 170-173.
- 菊池章夫 (2004). Kiss-18研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要**6**, 41-51.
- 古市裕一・乗金恵子・原田雅寿 (1991). 主張性検査の開発 (I) 岡山大学教育学部研究集録, **86**, 33-43.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究**11**, 86-98.
- 益子洋人 (2008). 青年期の対人関係における過剰適応傾向と, 性格特性, 見捨てられ不安, 承認欲求との関連 カウンセリング研究, **41**, 151-160.
- 松井単衣 (2006). 青年期における非主張的タイプの特徴について; 怒りの捉え方の観点から 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **53**, 234-235.
- 三田村仰・横田正夫 (2006). アサーティブ行動阻害の要因について—対人恐怖心性からの検討— パーソナリティ研究, **15**, 55-57.
- 森治子・長谷川浩一・石隈利紀・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 不合理な信念測定尺度 (JIBT-20) の開発の試み ヒューマンサイエンスリサーチ Vol.3, 43-58.
- 中山治 (1989). 「ほかし」の心理—人見知り親和型文化と日本人 創元社.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 斎藤美津子 (1993). なぜ日本人は自己表現が下手なのか 児童心理, **47** 金子書房.
- 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み—項目反応理論による検討— 行動療法研究**30**, 87-98.
- 沢崎達夫 (2006). 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係 目白大学心理学研究, **2**, 1-12.
- 柴橋祐子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, **31**, 19-26.
- 柴田利男 (2010). きょうだいとのコミュニケーションが幼児の社会的認知の発達に及ぼす影響 北星学園大学社会福祉学部北星論集**47**, 1-10.
- 重吉直美・森田愛子・湯澤正通・大塚泰正 (2010). 小学生の社会的スキルと一緒に遊ぶ人数の関係についての検討 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **8**, 87-93.
- 菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究**57** (3), 134-140.
- 高濱怜美・沢崎達夫 (2012). 非主張性研究の現

- 状と課題 目白大学心理学研究, **8**, 63-72.
- 高濱怜美・沢崎達夫 (2013). 非主張性尺度と青年用アサーション権尺度の作成 目白大学心理学研究, **9**, 65-75.
- 高橋均 (2006). アサーションの規定因に関する研究の動向と問題 広島大学大学院教育学研究科紀要, **1**, 35-43.
- 玉瀬耕治・馬場弘美 (2003). アサーションに及ぼす場の認知の影響に関する研究 教育実践総合センター紀要 **12**, 43-50.
- 田中道弘 (2005). 自尊感情における社会性, 自尊感情形成に際しての基準—自己肯定感尺度の新たな可能性 下斗米淳(編)(2008). 自己心理学6社会心理学へのアプローチ 金子書房 pp. 27-41.
- 土田恭史 (2007). 感情表現と健康行動との関連—感情抑制が健康行動エフィカシーに及ぼす影響の検討 カウンセリング研究 **40** (1), 51-58.
- 渡部玲二郎・稲川洋美 (2002). 児童用自己表現尺度の作成, および認知的変数と情緒的変数が自己表現に及ぼす影響について カウンセリング研究, **35**, 198-207.

—2013年9.25受稿, 2013年11.15受理—

A study on the relationships between Non-assertiveness and its deteminants

Satomi Takahama Mejiro University, Graduate School of Psychology
Tatsuo Sawazaki Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2014 vol.10

[Abstract]

Recently, assertion has received attention as a part of smooth communication. Communication that is not assertive can be classified as either aggressive or non-assertive. This study conducted research regarding non-assertiveness that “values the other party but does not value the self” and its determining factors.

A group survey study was conducted on 306 university students in Tokyo and a multiple linear regression analysis was performed to study the relationships of the variables. The results demonstrated that interpersonal anxiety had the greatest effect on the emotional aspects of non-assertiveness and that the lack of social skills had the greatest effect on the behavioral aspects of non-assertiveness. These results suggest that to improve the emotional aspects of non-assertiveness it is effective to approach the high level of interpersonal anxiety, and to improve the behavioral aspects of non-assertiveness it is effective to approach the low level of social skills. Future research is required on the determining factors that were not uncovered in the current study.

keywords : assertion, non-assertiveness, interpersonal anxiety, social skills